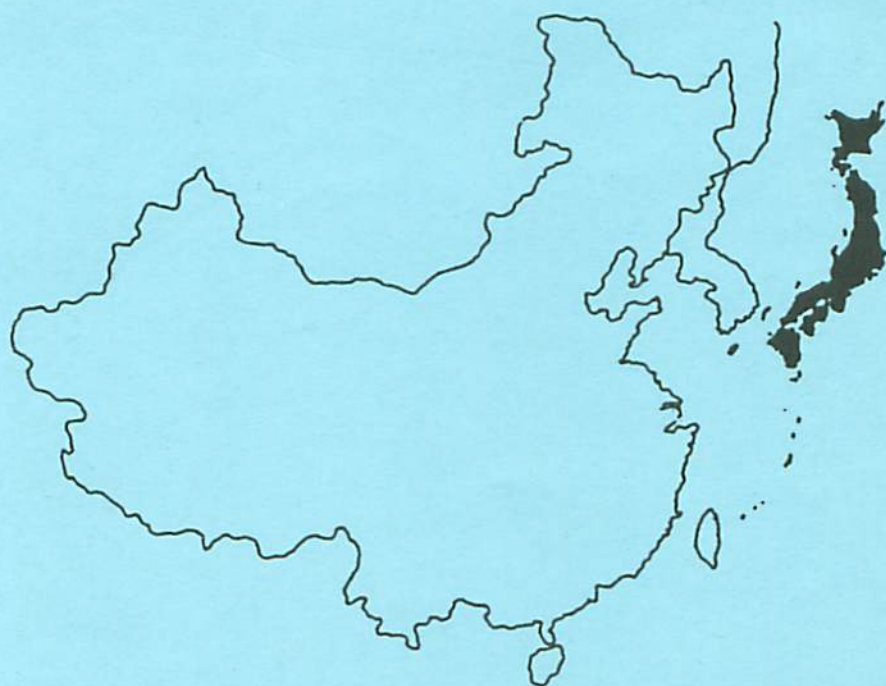


FD#

日本ビジネス中国語学会

会 報

第12号



第12回総会開催

公開講演会・会員シンポジウム（第12回）を同時開催

日本ビジネス中国語学会の第12回総会が、6月29日（土）午後2時より、大阪市北区の大阪中国語学院において開催され、熱心に審議を行いました。

総会設立を確認後、藤本恒会長が議長をつとめ、2001年度の活動報告、収支報告と今年度の予算案、活動案などの審議を行いそれぞれ承認されました。

学会の広報活動としてホームページ増強グループを設けるために会則の一部改定を行いました。

総会の後、公開講演会・シンポジウムが開かれ、榎原茂樹先生が「対中取引、忘れぬ一コマ」の演題で、学生時代の中国語学習の様子から商社マンとして延べ12年に亘る中国滞在のエピソードを話され、武吉次朗先生は「私の日⇄中翻訳論」の演題で、翻訳の歴史から翻訳の苦労やピッタリの訳語を探り当てたときの快感などを話されました。

（講演要旨は本号に掲載）

終了後、会場を移して懇親会を催し、中国問題など自由に語り合い親睦を深めました。

日本ビジネス中国語学会第12回定期総会議事録（要旨）

2002年6月29日（土）大阪中国語学院

1. 14:00 議長選出 会則にもとづき藤本恒会長が議長をつとめる。
2. 総会成立 武吉理事長より報告。4月1日現在会員47名の内、出席者8名、委任状31名、合計39名。過半数で成立を確認
3. 報 告 活動報告（武吉次朗）：資料にもとづき報告。承認
収支報告（岩下孝彦）：別紙の通り収支状況を報告。
監査報告（待場裕子）：正確に記帳されている事を認める。承認
4. 活動案提出 武吉理事長より資料にもとづき提案。承認
5. 予算案提出 武吉理事長より資料にもとづき提案。承認
6. 14:30 閉会

*総会成立会員数47名は2001年度会費納入者の数で、会員名簿数とは差があります。

対中取引、忘れ得ぬ一コマ

平成14年6月29日

学会シンポジウムにて

榎原茂樹

班門弄斧

歴戦の諸先輩を前にして、若輩の私が報告をするのは正に、班門弄斧です。

昨年の総会で何か話するようにとの藤本先生の要請があり、重たい気持ちであったところ、伊地智先生の急逝による追悼会となった。これで、私の話はお流れになったと思っていたところ、今年に繰り延べたに過ぎないとのことで、今日となった次第です。

どんな話が良いか迷いましたが、藤本、武吉両先生にもご意見を求めたところ、経験談が良かろうとのことで、昨秋母校である神戸外大の中国学科卒業生全体の同学会で、私が講演しました「昨今の日中経済関係」の中より、そのプロローグで紹介した中国にまつわるエピソードの幾つかを織り交ぜてお話しすることになりました。

お話に入る前に、私の略歴とそのキーワードを先ずご紹介し今回のプロローグとします。

プロローグ

神戸外大

坂本先生、中国訪日団、中国映画

昭和40年卒。

坂本一郎先生：発音練習、仲人

南漢宸訪日団（当時中国銀行総裁）：歓迎会、“青年”万年筆、田崎真珠

中国映画：「達吉和她的父親」シナリオ、海員会館、オープンリール録音機、末延先生

ニチメン

中国滞在延べ12年、単身赴任

昭和40年入社、平成8年退社。31年勤務、単身赴任18年半。

訪中滞在日数：累計12年、駐在：北京、上海、青島、（ウルムチ、天津）

日中経済貿易センター JCCNET、信用調査

JCCNET：インターネット利用の有料サイト、日中貿易実務レベルでの利用価値大
信用調査：中国企業（含む三資企業）の信用調査

外大講師 ビジネス中国語（大阪・神戸外大）

神戸外大：商業中国語 昨年よりスタート 社会に直結した人材育成

大阪外大：ビジネス中国語 今年よりスタート 昼間・夜間 熱意大

対中取引、忘れ得ぬ一コマ

初訪中と文化大革命

鉄砲持ってるか

1967年春に初訪中、時は文化大革命が蓬勃开展。中山大学キャンパスでの日中青年交流。中国側青年よりの質問“先生は鉄砲持ってますか”、日本側が答えに窮していると“毛主席教导我们说「枪杆子里面出政权」、なぜ鉄砲を持って反動派を倒さないのですか”と。最初に強烈なカルチャーショック。

紅衛兵と毛語録

商談に同席する紅衛兵、「世界是你们の、也是我們的、但是归根到底是你们的。你们青年……」、毛語録の引用合戦に圧倒される。負けてはならじと、後日、毛語録の成語、慣用語を抽出チェック、72文例に纏めました。語録の歌も併せ習得。

周総理との握手

日中国交回復の前夜、北京に半年交代の駐在時、LT貿易の交渉団の一員（機械商談）として現地参加時、日本より大豆交渉団（ニチメンより渡利課長―後社長）と共に中国側の招待で北京政治協商会議講堂で現代京劇を観劇時、幕間の休憩で貴賓室に居たところ、驚いたことに周総理が突如現れ、我等日本よりの交渉団を接見されることになった。我々より緊張したのは接待単位の先生方であった。大豆は金光石氏、機械はベアリング担当の曹龍昌氏が当日アテンドされていた。

周総理は我等団員一人一人に眼を合わせつつ握手された。私も緊張しつつも中国語で“能见到阁下,感到光荣”とか何とか言いましたが、それに対し周総理はナント日本語で“今晚は”と応ぜられ正に感激不尽でした。総理の手のひらが

大変軟らかくて分厚かったことがとても印象的でした。

観劇より宿舍の新僑飯店に帰り、その事を同志に言ったところ、驚いたことに彼等が我先にと私に握手を求めるではありませんか。思うに当時、文化大革命で相当厳しい環境にあって、民衆の周総理への敬愛と期待の強さに二度ビックリした次第です。

人間万事塞翁が馬

火力発電プラント

1973年夏、唐山火力発電所新設プロジェクトに東芝・IHIと組んで商談。国交回復後初の大型火力プラントの引き合いとて、日立グループとの熾烈な受注合戦を展開。私はタービン部門の技術通訳として参加しましたが、最終的には我がグループは敗退しました。

唐山大地震

成約に至った日立グループは成約後、建設サイトの唐山に担当者を送り込み建設への準備を進めていた。そこへあの大地震が襲い、日立と関係商社の方が亡くなられた。今にして思うと、あの商談に成功しておれば、行き掛り上、私が現場に派遣され、同じように遭難したに違いありません。商談敗退は悔しい限りではありますが、それ故に命が救われたこと、正に人間万事塞翁が馬を身にしみて体験、亡くなられた方の冥福を祈るのみでした。

談判四方山はなし

ノウハウはコピー代？

70年代の後半に入り、中国はカラーテレビの国産化を目標に、そのキイコンポーネントであるブラウン管の製造プラント導入を本格的に始めた。中国政府は日本よりの導入を最優先し、例によって東芝と日立を競わせる手法に出た。わが社は東芝グループを担ぎ、技術交流、商談に臨んだ。技術面でのすり合わせを終え、愈々価格ネゴに入った。ノウハウ料の評価につき、中国側はノウハウ料はコピー代で良い筈と主張し、日本側は開いた口が塞がらず、議論は噛みあわずハードネゴとなった。中国側の言い分は、ノウハウと言うものは売れて幾らかであり、売れなければ一文の儲けにもならない、競争相手にもっていかれればそれまで、今回コピー代だけでも貰えればそれだけ儲かることになろ

うと言うものであった。中国が未だ国際取引のルール慣用に慣れていないという事を差し引いても余りもの暴論（策略？）に日本側一同対応に難儀した次第です。

好吃么

70年代の後半、中国よりの食材の開発輸入が始まった。わが社は他社に先駆け、漬物類の開発輸入を目指すことになった。当時は今ほど自由な行き来も俚ならず、技術交流も思うように運ばなかった。まず、キュウリの漬物から手がけようとて、加工にかんする交流を経て、ようやく試作品が出来上がった。広州交易会の席上、中国側より糧油食品総公司、分公司、加工工場の面々が出席、日本側よりユーザーも交え、試作品が出され、試食とあいなった。出されたサンプルを日本側が先ず試食したところ、漬物とは程遠い代物であった。それを中国側にも席上同じように食して貰ったところ「好吃么」と言うではないか。素材、塩加減はマニュアル通りであるが、菌ざわりが全く無く、噛めばグニャとするばかりで、いわゆる菌ごたえが無いと言葉を尽くして説明すれど「还是好吃么」を繰り返すばかり。日中間の食習慣、貿易慣習など乗り越えるべきハードルが高く、この商談が実るまでには、それから数年の歳月を要しました。

失策と試練

大豆ファームオファー

中国は今では大豆は輸入国となったが、国交回復以前より中国の東北地方で取れる黄大豆は対中輸入の主要商品の一つであった。文革覚めやらぬ70年代の初め、北京に一人で駐在時、10月9日の午後、糧油公司より、数千トンのファームオファーを受けた。オファー期限は10日午後5時。当時は日中間の通信は電報で、普段は翌日配達の日付電報で発信しているが、今回は緊急でもあり加急電報を東京本社に打った。私は毎日、その日の出来事を全て夜、整理し、あくる日に備えていた。夜12時近くになり、今日の大豆のオファーの件を記録していて、10日が日本の祝日であったことに突然気が付き、顔面蒼白となった。その時点で日本よりの返電が届いていないということは、会社には電報が着いたものの、誰も見ぬまま、休日に入ったものと思われる。このままでは折角のオファーが流れ商機を逸することとなる。日本は既に午前一時を回っており、糧油公司にも連絡も取れない。明日を待たざるを得ないことは重々

判っていても、それから殆ど寝るにも寝れず、おまけに緊張の余りか、おデコにタンコブのようなものが出来、それが大きくなりだした。明くる朝、先ず糧油会社に連絡し10日の祝日の失念を伝え、オファー期限の延長を懇請し、11日までの延長の確認を得た上、本社の営業責任者の自宅に緊急の国際電話を入れ、事なきを得た。オデコのタンコブはこれにて凹み出し、11日の久しぶりの大量成約をもって完全に元のオデコに戻り、本当にヤレヤレ的一幕でした。

毛布で電話

1967年、初参加の春の広州交易会。私は入社3年ながら、事務局詰め兼物資関係の担当として参加した。当時の日中間の通信は国際電報が主流で、電話は殆ど利用されることはなかった。しかし、商談が煮詰まる交易会期間の終盤には、電話も利用された。しかし、当時の電話は香港経由で、音声が互いに聞き辛く、通話料が高い割には用をなさないこともしばしばであった。会期閉幕間際のある日の午後、団長の指示で関係者が日本の本社に最後の手段の電話を順番に掛けることとなった。私も物資担当者として最後のほうで利用させてもらった。しかし相手の声が殆ど聞こえず、こちらの言うことが相手に伝わったのかどうかも確認も取れず、何度も大声で同じ事を繰り返すばかりであった。当時のホテルは冷房もなく、クソ暑い中、少しでも相手の声を聞き取るべく、夫々が部屋の毛布を頭から被り汗だくになりながら奮闘した。因みに私の最後に相手に言った言葉はナント「今言ったこと、念のため電報いれるので、それ見て返事下さい」でありました。

騒音と灼熱

初めての北京駐在は文革最中の1967年でした。春の広州交易会終了後、天津での日本科学機器展覧会をアテンドの後、北京に入ったのは6月で、宿舎は新僑飯店でした。当時、ホテルの南側にあった東西に連なる城壁が壊され、中国初の地下鉄建設工事が始まっていた。工事は北京駅から崇文門に掘り進められ、更に前門に向かって、巨大な溝がオープンカットで掘り進んでいました。工事現場は事務所の目の下で、相当の騒音と砂埃であった。更に輪を掛けて往生したのは、工事現場を挟んで南側にある掘った砂の処理場である。ここでは24時間昼夜を問わず旧式のブルドーザーがケタタマシイ音をたてている。今でも耳に残っていますが、深夜にも関わらず、砂山に押し上げる腹にこたえるエンジン音、かきあげた山の頂きでブレードを揺らす「キャッキヤ」という音、

その後砂山をバックで駆け下りるキャタピラーの異様な音、この3つの異なる騒音が幾度となく夜通し繰り返されるから、たまったものではありません。今なら、文句の一つも言えませんが、当時の異様な外部環境では我慢するしかありません。しかも真夏、ホテルには冷房なども無く、駐在の仕事は深夜に及び、疲れはて寝入った時のみ騒音と暑さから開放される日々が延々と続きました。

私は負責人

泰山ロープウェイ

70年代の末、改革開放の具現の一環として、中国よりロープウェイの引き合いを受けました。設置場所は天下第一山の泰山。わが社はゴンドラを東急車輛、駆動装置を東京索道と組み、欧州、日本他社との激戦の末、受注に成功しました。中国では初めての本格的ロープウェイの導入とて、歴史史跡とのマッチングや技術、安全性そして値段については厳しい注文が相継ぎました。中天門から南天門まで30人乗り、秒速5mと当時では世界最新鋭の装置でした。成約後、詳細設計のため、メーカーの技術者と共に何度か現地に足を運び、支柱設置と路線調査で道なき道を藪漕ぎし、学生時代、ワンダーフォーゲルをしていたこともあり、束の間の青春が甦りました。

孔府

最終設計が終わり、中国側の招待で曲阜の3孔に案内された時のことです。代代孔家の住まいであった孔府では、その責任者が我等を自らガイドしてくれました。建物は文革を経ても良く保存されており、至る所に“嚴禁煙火”の張り紙が貼ってあった。孔家歴代当主の妻の肖像画を展示している部屋に入ったところ、この責任者先生がこともあろうにタバコに火をつけモクモクとやりだしたではないか。私が思わず、張り紙を指差し注意を促したところ、何と曰く“我是負責人”、とて平然。私は、中国の慣習常識とは何か、負責の意味は何かなど随分考えさせられた次第です。

リスクはチャンス

天安門事件

1989年6月4日の事件当時、私は北京事務所の所長として北京に駐在し

ていた。3日未明の事件の直前、私は宿舎の民族飯店のカーテンの隙間から、復興門より入城した解放軍の動きを間じかに、先日亡くなった松村誠三氏と共に、固唾を呑んで見つめていた。その時の状況はこのテーマを外れるので、別の機会に譲るとして、あくる日の朝、余りに気になることから、行ける所までと徒歩で東に向かったが、西単より東は軍の規制で行けず、交差点辺りは焼けた路線バス、戦車に踏み敷かれ累々たる自転車が放置され、異様な光景がありました。

事務所一時閉鎖

事件後は、市内交通寸断で、事務所への出勤は私を含め全駐在員が全く出来なくなり、駐在社員15名との連絡は電話のみに頼らざるを得なく、その後、本社よりは外務省の勧告を背景に、家族も含め全員、直ちに一時帰国せよとの指示を受けました。私は個人的には全員が帰国避難するまでもないと思ってはいましたが、万が一を考え、事務所の一時閉鎖と全員の一時引き揚げを決意し、それに全力を投入しました。

当時、社員と家族併せて30名の宿舎は4箇所に分かれおり、私は終日、電話のみで全員に連絡し、耳が受話器で腫れ上がった。無事に出国させるため、全員を空港への経路が確保しやすい崑崙飯店に移動させました。また市内の交通事情は極めて悪く、ガソリンスタンドは全て閉鎖され、タクシーは街から姿を消していました。北京空港までの足は社有車に頼らざるを得ず、夫々の車のガソリン残量を確かめた上、先ず子供のいる家族、夫婦のみ、単独身赴任者の順に帰国させました。最後に私と総務部長の二人が、建国門外の長安街南側にある事務所の一時閉鎖に向かうことになりました。

崑崙飯店から事務所への往復は、空港までの社有者のガソリン残量を確保するため、タクシーをと考えましたが、タクシーは尽く姿を消してしまい中々捉まらず弱っていた。運良く、そこへタクシー一台が崑崙飯店に入ってきた。運ちゃんは勿論会社とは関係なく、危険を承知の一匹狼である。事務所往復を告げると、400元貰わないと行けぬと言う、普段なら精々20元のところ何と20倍もの吹っかけである。タクシーはこれを逃すと何時来るか全く予想も立たず、さりとて言いなりに支払うのは、杓に触るので、ここは強かな運ちゃんとハードネゴをして、結局半値の200元（勿論後払い）で手を打ち、事務所に向かいました。

国際大廈より建国門外大街を横切れば事務所のある芦堡大廈である。ところが、この道を横切る人と車は今や皆無の状態で、建国門の交差点に不気味な戦車が3台、砲塔を水平にこちら東を向いており、何か事があれば発射せんとばかりの姿勢で並んでいました。道路を渡らねば事務所には行けずとて、車で道を横切り、もしここで打たれれば1巻の終わりと思うと、私は干からびた喉に生唾の痛みを痛烈に感じました。事務所ビルの下で、運ちゃんを待たせ事務所に入り、事務設備の確認や戸締り、そして客先、現地社員への一時帰国はするが必ず戻るとの張り紙をして、作業を終えました。そして再度決死の道路横断の末、無事崑崙飯店まで帰り、運ちゃんとは堅い握手を安堵の笑顔でかわしました。

工人魂

中国国貿促の設立40周年記念行事にニチメン田中社長が招待され、北京に随行した時のこと。全ての行事を終え、タクシーで頼まれていた買い物をしたあと、そのまま宿舎の長富宮飯店に社長を迎えに行った。車を捨て、社長を出迎えたところで、先程のタクシーにカメラを忘れたことに気がついた。カメラには今回社長訪中の全てのスナップが入っており、帰国後は社内広報誌に写真入で掲載する予定であった。私は慌てた、社長は“どうした？”と。時は中国が市場経済に突進中、街には拝金主義が溢れ、タクシーの後部座席に置き忘れの外国製カメラは最早戻ることにはあり得ないと思われました。半ば諦めつつも、ホテルの玄関に乗り捨てたタクシーの姿を追い求め、そしてホテルのフロントにも事情を伝え、協力を求めました。

むなしい時が過ぎ去り、社長の帰国への出発の時間が迫った。私は未練がましく最後のチャンスとて玄関先で来ぬ車を待った、その時でした。あのタクシーがやって来るではありませんか、そして、あのカメラが司機の手にしっかり握られてるでは無いですか。感謝感激の一瞬でした。そして、北京には尚も素晴らしい新中国の工人魂を持った労働者が居たことに心の温もりと無常の喜びを感じた次第です。

おわり

私の日⇄中翻訳論

平成14年6月29日

学会シンポジウムにて

武吉次朗

一、日⇄中翻訳の歴史

飛鳥・奈良時代には帰化人の子孫が「音博士」を世襲し、漢音を教えたので、当時の知識人は漢文を音読でき、漢詩を自作できた。

平安時代に返り点やヲコト点などの訓点が登場し、漢文の訓読みが始まる。

江戸時代、唯一の対外窓口である長崎に、南蛮（ポルトガル語）通詞・オランダ通詞と並んで唐通詞が置かれた。彼らは役人であり、大通詞・小通詞・稽古通詞・内通詞などの職階に応じて禄高が決められた。

明治の文明開化期には、欧米の新しい思想・制度が日本語に訳されたが、西周等の訳者がいずれも漢籍の素養が深かったため、日本語の訳語が中国語にも取り入れられる現象が起きた。たとえば *economics* を清国では「富国策」「計学」「生計学」「資生学」などと訳されたが、孫文が日本語の「経済学」を採用するよう主張し、やがてこれに統一されたという。史有為氏の《汉语外来词》によれば、《现代汉语词典》に収録されている語彙のうち、日本語から入った可能性が大きいものは768あり、欧米からの721を上回るという。

その後1945年までの翻訳・通訳には侵略の陰影がつきまとっている。軍人の間では侮蔑感の強い「兵隊シナ語」が使われたし、旧満州在留日本人の間でもこれに似た「協和語」が幅をきかせた。

そして近年に至り交流の広がりや深まりにともなって、あらゆる分野で翻訳・通訳の需要が飛躍的に増え、プロも誕生している。

二、翻訳の定義と基準

広辞苑には「ある言語で表現された文章の内容を他の言語に直すこと」とあり、《现代汉语词典》には“把一种语言文字的意义用另一种语言文字表达出来”とある。私は遠藤紹徳氏の「ある言語で表現された情報を、別の言語の等価な情報におきかえること」というのが氏のいうように「各ジャンルの翻訳に当てはまる共通の無難な定義」と思う。一種の再創作である。

基準については、嚴復の「信、達、雅」があまりにも有名だが、今なおこれを超える新基準は見当たらないようである。原文に対しては「信（忠実に）」、訳文については「達（滑らかに）」、そして「雅（美しく）」とは、原文の風格、気品、持ち味を訳文であげやかに表現すること、とされる。嚴復によれば“文字的整洁流利，声调的和谐动听”となるが、ここまで到達するのは至難の技であり、欧州ではこんな“格言”まで登場する。Translations are like women…when they are faithful they are not beautiful, when they are beautiful they are not faithful. これを中国語では“翻译文好比女人—忠实的不漂亮，漂亮的不忠实”と訳しており、日本語では米原万里氏がいみじくも『不実な美女か、貞淑な醜女か』と題した本を出している。

ただ通訳の場合にはTPOがある。パーティーの場合などで「忠実さ」にこだわってはいは料理も雰囲気も冷めてしまうから、手早くさばくのがコツだし、外交や価格ネゴでは「忠実さ」を優先せざるを得ない。

三、翻訳のポイント

原文の理解力（背景の諸事情を含めて）と訳文の表現力がポイントであることは自明の理だが、中文日訳に限っていえば、漢文調から脱却し、こなれた日本語にすることがポイントになる。言い換えるなら、論理的な中国語と情緒的な日本語との格闘である。

芹洋子の「四季の歌」が一時期、中国でも流行ったが、肖兵の名訳に思わなくなった。「心きよき」を“心地纯洁”、「心つよき」を“意志坚强”、「心ふかき」を“感情深重”、「心ひろき」を“胸怀宽广”と訳しているのだ。日中辞典で「清い」を引くと“清彻,纯洁,洁白,纯真,清爽”「強い」は“强壮,强烈,厉害,坚强,擅长”「深い」は“深厚,深重,深沉,密切,深奥”「広い」は“广大,广阔,辽阔,宽敞,广泛”などとある。逆にいえば、中国語のこれら形容詞を訳すとき、やまとことばが思いつくか、ということになる。

大野晋氏は「日本語練習帳」で「明白な事実」「明確な意思」「鮮明な視界」「明晰な頭脳」を「はっきりした」という和語で統一できるという。私はかつて中国の視察団をある工場に案内した際、社長が「わが社のモットーは、物をつくり、富をつくり、人をつくることです」と挨拶され、とっさに“我公司的

宗旨是、制造产品、创造财富、造就人才”と訳したが、これを統一した中国語動詞には絶対できないな、とつくづく感じたことがある。

和語は万能ではないが、和語の使い方に熟達することをぜひ心がけたいものである。

四、翻訳の基本テクニックと格調

二ヶ国語に通曉することをふまえ、翻訳特有の技法を駆使する必要がある。原文にないことばを付け加える加訳、その逆の減訳（不訳）、肯定形と否定形を入れ替える反訳（裏返し訳）、品詞や文の成分を変える変訳、前後をひっくり返す倒訳、一つのクローズやセンテンスを分割する分訳、その逆の合訳の7つが基本になる。このような処理法があるということを知っておくだけでも、実際に翻訳する際に役立つ。

変訳について2点、補足しておきたい。

中文日訳の際には、他動詞をできるだけ自動詞に変えることが望ましい。金田一春彦氏は「あなた、お茶がはいりましたよ」という日常会話を、いかにも日本語らしい表現だとしているが、中国語ならさしずめ“我给你沏茶啦!”となるだろうか。

横川伸氏は『中国語』7月号で「大地をゆるがしとどろきわたる雷神のおたけび」を“雷神啊,你的吼声震撼了大地,响彻了四方”と訳し、「日本語の修飾語を中国語訳の述語として処理するのが和文中訳の基本」と指摘している（中文日訳ならその逆の処理になる）。

翻訳の格調のうち、通訳についていえば、発言者の立場・身分・性別・年齢などにふさわしい言葉づかいが重要であり、翻訳についていえば、登場人物の人間関係にも留意せねばならない。特に日本語はおとなとこども、男性と女性、目上と目下に応じて言葉を使い分けるので、細かな配慮が不可欠である。中国の四人組逮捕の経緯を訳した近刊に、葉劍英が華国鋒に「あなたが立ち上がって闘うべき」と諭す場面があるが、二人の関係から見れば「あなたが」ではなく「君が」とすべきであろう（原文は“你”）。

五、文化の相違の橋渡し

これについては、鳥飼玖美子氏が『歴史をかえた誤訳』で面白い例をあげて

いる。太宰治の小説『斜陽』をドナルド・キーンが英訳した際、華族夫人の往診に老医師が袴・白足袋の正装で来たのを「正装ではあるが、やや古めかしい

旧式の和服」と訳し、白足袋で再度往診したときは「白手袋」と訳した。この処理をめぐって、「戦後の日本文学の英訳の中でも特筆すべき名訳」と絶賛する人と、「英語文化圏の解釈系のままに書かれているのを理解するだけで、日本文化の中で白足袋がもつ意味が伝わらない」とする見解と、評価が真っ二つに割れた、というのである。

永田小絵氏もユニークな通訳体験をしている。日本人の化学者が「ネバネバして糸を引きます、ちょうど納豆のようです」と発言したとき、彼女が“好像拔丝山药”と訳したら、中国側の聴講者がいっせいにうなずき、それを見た日本人化学者は「中国にも納豆があるのですね!」と感心した由である。

通訳のとき、いちいち解説をつけることもできないし、翻訳でも学术论文ならまだしも、くわしい脚注をつけることは如何なものか。悩ましいところではある。

六、 翻訳者の条件と上達法

翻訳者の条件については、藤岡啓介氏が『翻訳は文化である』で次の6点を示している。

- ①ものを書くこと、読むことにたけていること。
- ②分の専門分野を何か一つでも持っていること。
- ③自分が得意とする外国語を母語とする土地で暮らしたり、何度も旅行した経験のあること。その地の文化に知識と理解があること。
- ④その言語に人並み以上の知識があり、さらに複数言語を学習していること。
- ⑤さまざまな専門知識のある友人を数多く持っていること。
- ⑥すぐれた翻訳作品を読むこと。これは自分の表現の幅を広げるうえで非常に役立つ。

上達法の基本トレーニングとしては、河野一郎氏が『翻訳上達法』で縷々述べているが、要点は次のとおり。

1. 何よりも翻訳が好きなこと。辞典や事典を惜しまず備えるだけの幸運

のあること。

2. 他人の書いた文章を批判的な目で見ると。自分の書いた文章も他人に読んでもらい意見を聞く。
3. 日本文学に親しむ。気に入った作家の文体が真似られるぐらい読んでみる。
4. 辞書を気軽に引くクセをつける。さらに辞書には載っていない“語感”をつかむこと。
5. あらゆる手段と機会を利用して、音声面からも英語（われわれの場合は中国語）に親しむ。英語（同前）のリズム感を自分のものにする。
6. 読解力を高めるとともに、背景知識の吸収も心がける。映画を見るときもストーリーを追うだけでなく、好奇心で観察する。
7. 日本語の言葉の収集にたえず努める。母語の豊かさとレベルが最後の決め手になることを心しておく。
8. しやれを使い翻訳することを訓練する。どのような原文でも訳してみよう、という基本姿勢を保つ。
9. 文体創造の訓練に努める。性別・年齢・階層別により異なった表現を工夫する。
10. 翻訳者自身に合った作家と文章を選ぶこと。得意とするレパートリーを見つける。

七、私が実感していること

私と中国語の関わりは、戦時中ハルビンの日本人中学校で「注音字母」を仕込まれたときに始まる。戦後両親を亡くし一人で中国人の中に飛び込み、ともに働き、学び、暮らす中で中国語を身につけ、いちいち頭の中で翻訳せずとも、中国語で入ったものは中国語で受け止め、日本語には日本語で反応できるようになった。あと何歳か小さければ母語を忘れたろうし、逆に何歳か大きければ舌も頭も固くなっていたろうから、外国語を学ぶ“適齢期”だったようだ。

貿易団体事務局で長年、通訳と翻訳を日常業務として取り組む中で、日本語と中国語の語彙を増やすとともに、両国語を結びつけるコツをしだいに体得した。英語⇔日本語に関する翻訳論も読んだが、ほとんど手探りの悪戦苦闘で、恥と冷や汗をかきながら会得していった。35歳を過ぎたころから「油がのって

きた」のを実感できたが、これは人生経験を積むことで物事への理解力がついたからだろう。

振り返ってみると、外国語の習得はジェット機が一直線に上昇するようなわけにはいかない。階段を上ると同様に必ず何度も“踊り場”にぶつかり、スランプに陥る。何かをきっかけにその壁を突破すると、グンと上達していることが実感できる。この繰り返しで一步一步と上ってきた。

特に強調したいのは、翻訳は母語が決め手だ、ということである。後から学ぶ言葉は母語を超える筈もなく、どこまで近づくか、でしかない。翻訳のプロは、入門希望者にまず母語で何か書かせ、そのレベルで採否を決めるそうだが、むべなるかなと思う。

中国流に「三つの“お”」でしめくくりたい。

翻訳はおもしろい。ピッタリの訳語を探り当てたときの快感を、一度味わったら病み付きになる。

翻訳はおそろしい。自分の語学力・知識から性格まで、すべてさらけ出してしまうのだから。

翻訳はおくが深い。まさに生涯学習である。日中交流が未曾有の広がりや深まりを迎えたなかで、その架け橋になるのが無数の、無名の翻訳者であり、一人一人は一本のネジ釘である。いつまでも錆びないネジ釘でありつづけたい。これが私の念願である。

日本ビジネス中国語学会
日本商务汉语学会

ホームページ開設のご案内

昨年来の懸案でありました、当学会のホームページがこの程開設されました。次ページ以降にそのトップページをそのまま載せてあります。

『ヤフー』などの検索エンジンで『日本ビジネス中国語学会』を検索してホームページにアクセスしていただけます。また、下記ホームページのアドレス（URL）を入力すれば直接アクセスが可能です。

①<http://www.toho-shoten.co.jp/business/index.html>

或いは、中国語書籍専門書店である(株)東方書店の下記URLのトップページからのアクセスも可能です。

②<http://www.toho-shoten.co.jp/>

現在ホームページに掲載されている内容は、まだそれ程豊富ではなく、今後定期的に内容の更新・充実をはかって行く予定ですが、今回アップロードした内容中の「ビジネス中国語単語集」や、過去三年分の「ビジネス中国語検定試験問題及び解答と解説」などの日中混在文は、普通のパソコンでも自由に見ることが出来ます。一度アクセスしてみてください。

学習者のお役に立てばこれに勝る喜びはありません。

2002年6月

日本ビジネス中国語学会

日本商务汉语学会

日本ビジネス中国語学会 をキーワードに検索した結果
1 件の Yahoo!登録サイトに一致しました。



[カテゴリ検索](#)

[サイト検索](#)

[ページ検索](#)

[ニュース検索](#)

[辞書検索](#)

[ショッピング検索](#)

Yahoo!登録サイトとの一致 (1 件)

[社会科学](#) > [言語学](#) > [言語](#) > [中国語](#) > [団体](#)

- [日本ビジネス中国語学会](#) - ビジネス中国語の実用的研究。ビジネス中国語実力検定試験の解答・解説集。

[ページ検索の結果を表示](#)

[カテゴリ検索](#)

[サイト検索](#)

[ページ検索](#)

[ニュース検索](#)

[辞書検索](#)

[ショッピング検索](#)

絞込検索 : スペースに続けてキーワードを追加

[日本ビジネス中国語学会](#)

[検索](#)

[オプション](#)

日本ビジネス中国語学会
日本商務漢語学会

【日本ビジネス中国語学会のご紹介】

日本ビジネス中国語学会は1990年12月、故・伊地智善継先生（元大阪外国語大学学長）の発意で設立されました。

近年、わが国と中国の関係は経済や文化のさまざまな分野で、ますます広がり深まっていますが、このような交流に不可欠の手段である中国語について、主として実用的な面から研究をすすめ、その成果を普及させることが強く求められています。当学会はこのような気運を背景に設立されたものです。くわしくは別掲の設立趣意書をご覧ください。

「ビジネス中国語の実用的研究」には幅広い内容が含まれています。たとえば、それがビジネスの現場でどのように使われているのか、書簡や書類にどのような慣用表現があるのか、社会の変化と技術の進歩にともないどのような新語が生まれているのか、中→日・日→中の通訳と翻訳にどのような工夫が必要か、等々です。さらに、いわゆる「商売用語」だけでなく、経済全般ひいては社会生活に関連する言葉までカバーする必要があることを、多くのビジネスマンが実感しておられます。

当学会はこのようなニーズに応えるため、研究会と講演会の開催、会報の発行などをおこなっているほか、毎年1回「ビジネス中国語検定試験」を実施しています。これまで実施した2級・3級・4級の問題・解答・解説を別掲していますのでご参照ください。また次回の検定試験についてもご案内しています。

このような趣旨と活動に賛同される学界・実業界の皆様のご入会を心から歓迎申し上げます。

日本ビジネス中国語学会

会 長 藤本 恒（京都文教大学講師）
理 事 長 武吉 次朗（摂南大学教授）
事務局長 岩下 孝彦（大阪中国語学院事務局長）
事 務 局 〒530-0041
大阪市北区天神橋2-北2-26
マルサンビル4F日中語学センター内
日本ビジネス中国語学会

総会報告書

イベント

【検定の日程】

日本ビジネス中国語学会第 11 回検定試験日程

日時 2002 年 12 月 8 日 (日)

申込締切 11 月 22 日 (金)

受験料振込 11 月 22 日 (金)

受験票 11 月 26～29 日の間に返送

12 月 3 日までに届かない場合は 12 月 6 日までに事務局へ問合せ

注：昨年度第十回検定試験は 12 月 16 日 (日) におこなわれており、今回の第十一回は一週間繰り上がっております。従って、申込締切・受験料・問合せなどがすべて前回の実施要綱比一週間の繰上げになったのが変更点です。其の他はまったく変更ありません。

申し込み方法・検定料金：→●

【入会のご案内】

趣旨に賛同される方はどなたでも入会出来ます。入会ご希望の方は申込み用紙に会費を添えて、事務局までお申し込み下さい。

設立趣旨

会則 (2002 年 6 月改正)

入会用紙

【過去の検定問題とその解答及び解説集】

1999 年度より検定問題と解答、解説がご覧いただけます。

※中国語は中国の簡体字で表記されていますので、表示には簡体字のフォントが必要です。お持ちでない方は、こちらで！！。

1994 年から 1998 年までについては、検定試験問題と解答・解説をまとめた冊子がございます。

購入方法：郵便振込用紙に「問題・解答集希望」と明記のうえ、2200円（送料込み）をお振込みください。振り込み確認後、直接郵送いたします。

口座番号：00950-9-4857

加入者名：日本ビジネス中国語学会



定価 1800 円消費税 90 円

送料共 2200 円

【ビジネス中国語：達人への道案内】

長年、日中間のビジネス現場で活躍された諸先輩、諸先生方が学会のシンポジウムで講演されたお話を文章にしてご紹介します。

豊富な経験をもとにした楽しくて含蓄のあるお話や、中国ビジネスに携わる人間が常に考えるべき問題など誠に興味深い話ばかりです。

ビジネス中国語の上達を目指す方々は、是非、ご一読をお勧めします。

第1回

私の日<=>中翻訳論

武吉 次郎（摂南大学教授）

対中取引、忘れ得ぬ一コマ

榎原 茂樹（大阪外国語大学講師：非常勤）

【ビジネス中国語：達人への道案内】はPDFファイルになります。



【ビジネス中国語単語帳】

中国とのビジネスで頻繁に出くわす貿易関連用語と若干の時事用語を索引に便利のようにピンインのアルファベット順に並べ、発音及び簡単な訳または解説をつけたものです。約 300 語程度です。

※表示には簡体字のフォントが必要です。お持ちでない方は、こちらで！！。

日本ビジネス中国語学会

設立趣意書

明治以来終戦時に至るまでの間、わが国の外国語教育は、先進文化を吸収するための文化語学と、近隣諸国との軍事・通商に備えるための実用語学にはっきりと分かれていました。従って文化語学はアカデミックな研究であり、実用語学は技術的訓練にしかすぎないと見られてきました。そういう潮流の中で、中国語学界のエリートたちは、中国語学を文化語学としてアカデミックな研究の対象にしようと、第2次大戦末期に力説されるようになりました。

第2次大戦後は、曲がりなりにも中国語学はアカデミズムの片隅にその位置を見つけ、大学の教員もアカデミックな研究によって自分の業績を作るようになりました。しかし、一方で実用語学としての中国語学は軽視されるに到りました。外国語大学や社会科学系学部でも、商業経済や新聞雑誌に関する中国語研究は次第におろそかになり、そのため、この方面の研究に従事する人々は、共同に研究する基盤もなく業績を発表する媒体もないという有様であります。

言うまでもなく、日本のおかれている国際的地位は明治・大正と大いに異り、外国文化に関する見方も先進・落後という単純な区別はなくなり、わが国と中国との関係もまた文化から経済まで広くかつ深いものになっています。中国語の言語理論的研究はもちろんより一層発展させる必要があります。同時に中国語の実用的研究はそれ以上必要であると思われます。

近畿在住の数人の研究者が時折顔を会わせて論議しているうちに、全国各地に散在しているそしてまた学界のみならず経済界で活躍しているこの方面の研究者を結集して、中国語の実用的研究——例えばビジネス中国語・通訳翻訳の研究等々を組織的、体系的に推進するために、ここに「日本ビジネス中国語学会」をつくろう、という議が持ちあがりました。

趣旨に賛同下さる方々のご参加を心から期待しています。

日本ビジネス中国語学会会則

第1条 (名 称)

本会は日本ビジネス中国語学会と称する。

第2条 (事務所)

本会は事務所を大阪市内に置く。

第3条 (目 的)

本会はビジネス中国語に関する研究及び関係諸団体との交流を通じて、我が国における中国語学習者の語学能力の向上を図り、もって日本と中国の友好交流の発展に寄与することを目的とする。

第4条 (事 業)

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

会長は必要に応じて事業推進グループを設置することができる。

1. ビジネス中国語、翻訳・通訳に関する研究。
2. 日中間の相互理解を深める為の教育・研修事業。
3. セミナー、講演会の開催。
4. 機関紙の発行。
5. ビジネス中国語検定。
6. その他前各号に関連する事業。

第5条 (会 員)

本会の会員は次の通りとする。

個人会員 本会の目的に賛同して入会した個人。

法人会員 本会の目的に賛同して入会した法人。

第6条 (入 会)

本会の会員になろうとする者は、別に定める入会申込書を提出し、承認を得なければならない。

第7条 (退 会)

①本会を退会しようとする時は、理由を付した退会届けを提出しなければならない。

②会員は次の各号の一に該当するときは、退会したものとみなす。

1. 会費を2年以上滞納したとき。
2. 死亡したとき。
3. 会員たる法人が解散したとき。

第8条 (除 名)

会員が本会の名誉を傷つけ、又はこの会則に違反したときは、総会の決議により、除名することができる。

第9条 (役 員)

①本会に次の役員を置く。

会長 1名 理事長 1名 理事 10名以上15名以内 会計監事 2名

②理事及び会計監事は、会員の中から総会において選任する。

③会長及び理事長は、理事の互選とする。

④法人会員の代表は役員の被選任資格を有する。

第10条 (役員の職務)

①会長は、本会を代表し、会務を統括する。

②理事長は、会長を補佐し、会務を処理する。会長に事故あるときは、その職務を代行する。

③理事は、理事会を組織し、会務を執行する。

④会計監事は、経理を監査する。

第11条 (役員の任期)

①役員の任期は、2年とする。但し再任を妨げない。

②補欠により就任した役員の任期は、前任者の残存期間とする。

第12条 (役員の報酬)

①役員は、原則として、無給とする。但し、常任の役員は、有給とすることができる。

②常勤の役員の報酬は、理事会の決議により定める。

第13条 (顧 問)

①本会に顧問、相談役若干名を置くことができる。

②顧問、相談役等は理事会の議決を得てこれを委嘱する。

第14条 (総 会)

①総会は、定時総会及び臨時総会とする。

②総会は会員をもって構成し、この会則に規定するもののほか、次の事項を決議する。

1. 事業計画及び収支予算。
2. 事業報告及び収支決算。
3. その他本会の運営に関する重要事項。

第15条 (総会の召集)

①総会は会長が召集する。

②総会を召集するには、会議の議題並びに日時・場所を開催日の10日以前に通知しなければならない。

第16条（総会の開催）

- ①定時総会は、毎年1回会計年度終了後3ヶ月以内に開催する。
- ②臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、又は会員の5分の1以上の請求があったときに開催する。
- ③総会の議長は、会長がこれにあたる。

第17条（総会の議事）

- ①会員はそれぞれの一個の議決権を有する。
- ②会員は他の会員に代理出席を委任することができる。
- ③総会の決議は、出席会員の過半数をもって行う。

第18条（理事会）

理事会は、理事をもって構成し、この会則に定められるべきもののほか、次の事項を処理する。

1. 総会における決議事項の執行。
2. 総会に付議すべき事項。
3. 資産の管理。

第19条（理事会の召集）

- ①理事会は年1回以上開催し、会長が召集する。
- ②議長は会長がこれに当たる。

第20条（理事会の決議）

- ①理事会の決議は出席理事の過半数をもって行う。
- ②理事は他の理事に代理出席を委任することができる。

第21条（資金）

本会は下記の資金により運営する。

1. 会費並びに寄付金。
2. 事業収入及びその他の収入。

第22条（会計年度）

本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第23条（事務局）

- ①本会の事務を処理するために、事務局を置く。
- ②事務局は、理事長が統括する。
- ③事務局に常勤する職員は有給とすることができる。

第24条（会則の変更）

会則の変更は会員の3分の2以上の承認を要するものとする。

- 付則
1. 本会は1990年12月8日から発足する。
 2. 本会の最初の役員は設立発起人がこれにあたる。
 3. 2002年6月29日、一部改訂

役員名簿

(2004年の総会まで)

役員	氏名	所属先
会長	藤 本 恒	京都文教大学
理事長	武 吉 次 朗	摂南大学
会計監事	待 場 裕 子	流通科学大学
理事	伊 井 健一郎	姫路獨協大学
理事	榎 原 茂 樹	大阪外国語大学
理事	釜 屋 修	駒澤大学
理事	神 崎 多實子	N H K B S ・ 通 訳
理事	上 林 紀 子	京都外国語大学
理事	興 水 優	日本大学
理事	塚 本 慶 一	神田外国語大学
理事	戸 毛 敏 美	関西外国語大学
理事	橋 本 南都子	東海大学
事務局長	岩 下 孝 彦	大阪中国語学院

日本ビジネス中国語学会 入会のご案内

趣旨に賛同される方はどなたでも入会できます。

入会ご希望の方は申込み用紙に会費を添えて、事務局までお申し込み下さい。

(設立趣旨・21頁、会則22・23頁をご参照下さい。)

入会費	1,000円(個人)	会費	3,000円(個人)
	10,000円(法人)		20,000円(法人)

会費納入先 郵便為替 00950-9-4857 日本ビジネス中国語学会

連絡先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2-北2-26 マルサンビル4F

日中語学センター気付 日本ビジネス中国語学会

電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664

----- キリトリセン -----

入 会 申 込 書

日本ビジネス中国語学会

会 長 藤本 恒 殿

貴会に入会致します

年 月 日

ふりがな		女	生年	
氏 名		男	月日	年 月 日
ふりがな				
住 所	〒			
電 話	— —			
所 属				

会報 第12号 2002. 9. 5 発行

日本ビジネス中国語学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北2番26号 マルサンビル4F
日中語学センター気付
電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664